

『重刊老乞大諺解』(上)同音字表

2004251030 吉田知世・竹越 孝

はしがき

本表は、『老乞大』の清代改訂本の一つ『重刊老乞大諺解』(1795)上巻のハングル漢字音注(右側音)を対象とした同音字表である。テキストはソウル大学校奎章閣所蔵本(奎2049)の影印である『重刊老乞大諺解』(ソウル:弘文閣,1984年)により、ハングルのローマ字転写は河野六郎「朝鮮語ノ羅馬字轉寫案」(『Tôyôgo Kenkyû』2,1947年;『河野六郎著作集』1:96-97頁,東京:平凡社,1979年)の方式による。掲載スペースの関係から表を1から6まで分割し、縦軸に声母、横軸に韻母を配する。

この表のもとになったのは、竹越が愛知県立大学外国語学部で2006年度に担当したゼミ「中国研究演習」及び「研究講読」に参加した学生によるレジュメである。ゼミでは一話ごとに決められた担当者があらかじめ漢字と右側音のハングルローマ字転写を入力したレジュメを提出し、毎回の授業で漢字部分を講読するとともにローマ字転写の正否を検討するという形をとった。上巻にあたる第1話から第54話までを担当した学生の氏名は以下の通りである:吉田知世、柳谷太郎、宮本将道、橋本亜由美、藤田康代、古橋由依子、伊藤舞、坂本明日香、南里由香、羽田敬之、高野真由子。

その後、吉田知世が自らの卒業論文の資料とするため、竹越の作成していた漢字部分の電子データ(「老乞大四種対照テキスト」『中国語のコーパス構築および近世中国語テキストの計量言語学的研究』1-156頁,科学研究費補助金・基盤研究(C)研究成果報告書,2007年)をもとに、各担当者のレジュメを確認しつつ改めてハングルのローマ字転写を入力していき、最終的に同音字表の形に整理した。表のスタイルは、更科慎一「19世紀末朝鮮の北方漢語資料『華音撮要』の研究—ハングル音注を中心に—」(山口大学『アジアの歴史と文化』9:63-103,2005年)の附表を参考にしたものである。

上巻だけを対象とする同音字表というのはいかにも不完全であるが、他資料との暫定的比較において一定の効力を発揮すると思われるため、敢て掲載する次第である。また検索の便を考えれば、電子データの公開こそが望まれるのであるが、これは下巻の部分が完成した段階で考えることとしたい。

(竹越 記)